あさ 11

2012

三宝寺池

絵　　堀内一郎

俳書　佐藤喜孝

あと

十一月

水

佐藤喜孝

八月の皮の張ったる水いち枚

船蟲がからだの中に一二匹

觀音のほがみふくよか秋のこゑ

晝の蟲ぬれぬうちから雨宿

寒蟬や水に入るやう磴下りる

氈瓜やひさかたぶりに猫鳴ける

太綱の強く張ったる秋祭

わが家は何もかも未整理の状態である。であるから探しものは見つからない。が意外なものがひょいと出てくる。先日出て来たものは、昭和42年の山歩きの記録ノートの切端が一枚。6月3～4日赤城山。地下鉄30円とあり驚いた。赤城山岳夜行で赤城大洞まで。7月23日は奥高尾縦走。新宿635藤野527と途中経過を含め随分細かい。8月6日有明までの座席指定券、8月10日松本から新宿の座席指定が添付してある。きっと燕から常念・蝶ヶ岳を歩いた時のものだらう。もうすっかり忘れてゐた。

甲斐の旅

木村茂登子

甲斐の旅旬が輝く葡萄棚

虫の宿酒は人肌武田節

穂芒に招かれ穂芒に見送られ

白雲の湧きては崩れ晩夏かな

新涼や身のすみずみのほどけゆく

曼珠沙華一つ離れて曼珠沙華

閼伽桶に残る水痕彼岸過

九月十一日十二日二日間総持寺婦人会の研修旅行で山梨県に行った。

現在の総持寺貫主江川辰三禅師のご出身「清光寺」（甲斐源氏元祖清光公菩提所）に伺い、後、武田神社恵林寺等を廻り石和温泉に一泊、河口湖ー富士山五合目ー忍野八海を廻って来た。

国破れて山河あり

武田氏は悲惨な終末を遂げたが、後世に多くのエピソードを残した。

「風林火山」の旗印しかり、恵林寺山門には「火自涼」の聯を見る。

「人は石垣　人は城」の武田節等々。

富士山五合目では初冠雪を確認した。例年より十八日早かったとＮＨＫの七時のニュースで報じられた。

千載一遇の機会であった。

晩　夏

斉藤裕子

疾うに二十他人と思へ秋海棠

飴か鞭か親にも試練蓼の花

電線を捕へて一つ濃朝顔

天高し大地を蹴って逆上り

座席違へ咎めもされず花野原

明石海峡跨ぐ大橋水澄めり

生酔ひの本音がのぞく茸鍋

淡路島で一泊の同窓会があり、新神戸まで新幹線に乗った。少しの緊張感を持って品川で乗り込み、座席番号を確かめて窓際の我が席に坐った。積りだった。本を読み、車窓の景色を楽しみながらの一人旅。

新横浜で若い男性が隣の席に荷物を置いた。坐るのかと思っていたら違う席へ移って行った。続いてまた若い女性が、やはり隣りの席に荷物を置き網棚に載せたのに居なくなり、暫くしたら荷物を持ってどこかに行ってしまった。新大阪で乗ってきた二人連れのご婦人に席を尋ねられ、初めてひとつ前の座席と間違えていた事に気がついた。大失敗！

ぼんやりの私に、何も言わず席を譲って下さった心優しい若人よ、ご免なさい。そしてありがとう。

九　月

篠田純子

新涼の大根河岸や小鰭鮓

蚊蜻蛉のごとき手と足白露の日

傷口は妙な味する白露の日

ブラウスに秋のてふてふつきまとふ

新涼やをんな盛りの胡弓の音

秋暑しコップの割れる通夜の席

秋の雨遺骨ほっこり膝の上

十月六日に孫の幼稚園の運動会に応援に行った。娘夫婦は昨年末、千葉県へ引っ越した。孫は「幼稚園のそばには白いカラスがたくさん居るんだよ。」と言っていたが、どうも白鷺のことのようだ。ずい分鄙びた所だ。

かけっこ、お遊戯、綱引きと、頑張る姿は、こちらが励まされる。私も「敬老玉入れ」に参加。ちょっとムキになって競技した。

とんぼはちばったてふてふうんどうかい

園は印旛沼と利根川を結ぶ川添いに在り、このあたりは釣りの盛んな所らしい。橋のたもとに秋櫻子の

柴漬や古利根けふの日を沈む

の句碑があった。柴漬（ふしづけ）は漁法の一つ。

近くには、虚子や素十の句碑もあるようだ。

暑　さ

芝宮須磨子

立秋や一際高き明烏

ウエルカム手作り梅酒でもてなされ

ペンペン草手折り童にもどりをり

散歩道草々愛でて背に秋

豊漁の鮎と帰りし笑顔かな

むれすすきゆれて光りて季をつげ

茜雲手すさびにもつねこじゃらし

一川注ぐ

定梶じよう

ゆっくりと川は曲がって青すゝき
いい月が出て犬小屋の中の犬
あひ揺れてゐのころ草はあひ触れず
たうなすよ後期高齢とは何ぞ
通夜の家満月ゆくりなく懸かり
けふ蒔きし畝に影添ひ十三夜
長汀に一川注ぐ鰯雲

『俳句』五月号で、佐藤郁良さんが次のように仰有っている。

〈人の皆去りて滝音激しかり〉の「激しかり」は、「かり」で文を終始させる形はあり得ない。「激しかりけり」のように助動詞が接続する場合にのみ用いられる形であり、文法的に明らかな誤りである、と。

立枯れの唐黍鳴って物憂かり　漱石
蟋蟀の啼くゆゑ草木暗ちけく　誓子
長き長き春暁の貨車なつかしき　楸邨
夜桜も故郷も道も恋しけれ　竹久夢二

いずれも連用止め、連体止め、あるいは已然形で結句して、いう迄もなく言い切らずに余韻をのこすためのもの。何ら珍しい方法、テクニックではない。それをどうして「文法的な誤り」とするのか。昔の綜合俳誌には、こんな粗雑な（失礼！）論がのることはまずなかった。

白馬村

須賀敏子

眠られぬ夜は花野を想ひけり

沁み沁みと白馬三山天高し

八方の池の漣峰粧ふ

栂池や山鳥兜色濃ゆし

秋夕べ百観音の微笑かな

水澄むや白馬村角大黒天

見える時見えない時も秋の山

旅行誌で「白馬温泉郷のんびりフリータイム四日間」を見て、料金の安さとフリーという事で夫と二人参加した。川越九時バスで出発白馬には午後一時半到着。同宿二十三名は総てシニア世代。宿は岩岳地区にあるスキー宿である。食事は質素であったが、三日間工夫してあり、シニアには丁度良い様に思われた。

天候に恵まれたので二日目オプションを利用して栂池自然ヘハイキング。紅葉はやっと始まったばかりであった。三日目は八方池ヘトレッキング。この日は土曜日だったので、小さな子供を連れた家族を多く見た。四日目台風十七号の近づくなか無事帰宅した。シニア世代が上手にお金を使うと、日本の元気に少しは貢献できるのではないでしょうか。

葛の花

田中藤穂

過ぎし日の小過のあまた秋の蝉

川へでる近道険し葛の花

何指せる踊のゆびか風の盆

東より秋風を入れ歯を磨く

蕎麦の花安達太良山は闇に入る

ドライブの土産と薄置いてゆく

人身事故夏の終りの樹々揺るる

土曜日になると近くの民生委員の方が「田中さんお元気ですか。」と声かけにきて下さる。低い鉄門にいつも鍵をかけてあるので、私は門へ出て無事の顔をお見せする。「困ったことがあったら何でも言ってください。」と仰しゃってくださるので有難く心強い。雨でも風でも来て下さるので申訳ない日もあるのですが、玄関より中へは入らない、お茶など御馳走になっては駄目、という規則あるそうで、いつも門越しの会話で終ります。

北区は東京の二十三区で一番老人が多いそうで先行きが思いやられますが、まあ、私もまわりに御迷惑をかけないように一日でも長くしっかりしていなければいけないと思っている次第です。

虫

長崎桂子

節電にあはせて撒ける日向水

秋初め緑青すこし浮いて来し

秋の草パラリンピック見習て

コスモスに道草する児赤黒黄

コスモスの花束幼子のスキップ

虫しぐれ止む大粒の雨の音

警報の解除よろこぶ虫しぐれ

九月になっても一向に暑さが収まらない。

でも草花や野の花は、歩道の側や堤防に「秋ですよ」と言うように綺麗な色のかわいい花を咲かせている。其処を通る時、今年も咲いていて、ありがとうと安心します。

十年ほど庭に毎年来ていた揚羽蝶が、今年は来てくれなかったので少しばかり淋しい気持で気にかけて二ヶ月ばかり過ごしていたから。

昼間に出会うかわいくて美しい草花と、夜が更けてからの例年の様に庭の虫時雨を聞くと、たまらなく豊かで嬉しい気持になります。

❖

早崎泰江

虹の橋空にかかるは太古より

お互いに暑さをなげく長電話

何となく狗尾草にさそはれし

かすかなれど疑ひもなし鉦叩

郁子の実の赤紫に深み増す

台風一過十六夜の月はればれと

かなかなの杜に家建ち秋ともし

私の散歩コースの一つに鬱蒼とした杜があった。その杜は季節に応じてさまざまな鳥の宝庫のようだった。夏には朝な夕なに蜩が啼く、今年はあまりの暑さに夕暮の散歩も儘ならず杜のことも蜩のことも、すっかり忘れていた。

八月末のある日、思い立って杜の方へ向かったが杜がない、一瞬道を間違えたかなと思った。

そこには、マンション風の洒落た建物が並んでおり、その変貌ぶりに、ただただ驚くばかりであった。

けたたましい尾長の群が我が家のブルーベリーを啄みつくす、この異変も杜がなくなったことと何か関係しているのかもしれない。

今後ともこのようなことが周辺で続くのではないだろうか。

秋の虹

森　理和

さざれ波ゆるる落葉に飛蝗をり

この居間にソロの演奏鉦叩

通夜へ行く歩みを止めて秋の虹

白鼻心蛙蝙蝠庭に糞

送葬や鮭を茶漬けに遅昼餉

半分のズシリと重し南瓜買ふ

長い列捜してをるや秋の蟻

先日、片側二車線のかなり広い交差点の中央あたりで、ヘッド・スライディングよろしく転んでしまいました。横断歩道に段差がある筈もないのに、何故かバランスを崩してしまいました。幸いな事に、右肘に五百円玉ほどの擦傷だけで済みました。

その痂も剥がれ出す頃から右膝に違和感が生じ始めました。病院はあまり好きではありませんから、ここ二ヶ月ほど間遠になっていたプール通いを再開しました。

水泳を始めた頃には左腕を真っ直ぐに伸ばす事が出来なかったのに、いつの間にか治っていました。もう一度この膝も知らないうちに治ってくれます様に願いつつ、週二回を目標に、運動不足を補う事でもあり、水泳を楽しみます。

❖

吉成美代子

いつとなく雀の並ぶ秋の空

青すすき曲って消えし単線路

秋の月背伸びしている副都心

実南天雀にしては尾の長し

飛びうつり遊ぶ小雀菊の花

掃除用バケツのなかの菊の花

踏み外す階段地下鉄秋に入る

❖

吉弘恭子

波になるか潮にとけるか水海月

十三夜ひとりほほばる塩むすび

柿の実を触ってしまふ夕茜

肥後の守汗の親指斜交ひに

掌に汗のぼつてきたる睡魔かな

置き去りの月に鴉のかへる影

日のなかに翔びきて蜆蝶（しじみ）身をあます

子　鳩

赤座典子

ジーンズのズボン案山子の屯する

新米や地域応援旅土産

粕漬に相性のよし栗おこは

鵯騒ぐ洗濯機にもエコマーク

秋うらら山田正平遺作展

鮮麗なり黄を翻す秋の蝶

秋澄むやもこりと子鳩吾に向く

留守がちなせいか、鳩に庭の藤の中に、巣を作られてしまった。

去年は、早くに気が付き落としたのだが、今年も同じところに作り、もう卵をだいているという。

たまたま玄関を出た途端、巣からバサバサと飛び立ち、近くの電線から、こちらを見続けている。

まさに、母は強し、である。

見上げると、時々、丸くあけびの籠のように、しっかり作られた巣に二羽がいる。まるでお風呂に入っているように。

主人は、小鳩が上手に飛べず、隣家との境の透明なフェンスにぶつかって、落ちるのを見たという。

巣の下の芝生は、茶色の糞で、埋められつつある。

巣立ちが待ち遠しい。

秋の声

大日向幸江

貝割菜朝の光に太りをり

大百足三百六十五歩歩く

雨粒をとさかに一杯鶏頭花

歩幅揃ふ子供くんちの龍の舞

再訪の南京街に紅木槿

秋の声猫の耳穴オーム貝

猫の眼のまんまるとなる二日月

僕は自分の休みに合わせ好きな岩石の積み重なっている場所に眠る為に良く潜る。

その日も僕の頭の中はこの湾の西に聳える溶岩の崖に今夜の宿を取ろうと決めていた。真赤な月が水平線を登り始め月光が僕の行くべき道を煌煌と照らしている。満潮にゆったりと身体をまかせ西の崖になんなく着く。次の親波が来たら、黄土色の岩に着くはず。僕はもう夢の中に遊び始めた身体をなんとか波にまかせた。

「パパこれ、こんな所に丸いカタツムリが」小さなシャベルが僕の大事な岩を削り始めた。

「やめてくれ、僕の身体に触るな」

その時ゆっくりと僕の回りを掘る大きな手が僕を大事そうに自分の手の上に僕を乗せた。「アッ、見てごらんこのオーム貝まだ生きている。」

南アフリカ・ホーン岬は地球上で一番過酷な場所、人類とたった一人で三万年を生きたオーム貝の未知なる遭遇だった。

前月抄

つくつくの町に一ぴき來て去れり　佐藤喜孝

オニヤンマいじめられっ子の日曜日　大日向幸江

よく冷えて角立っている水羊羹　木村茂登子

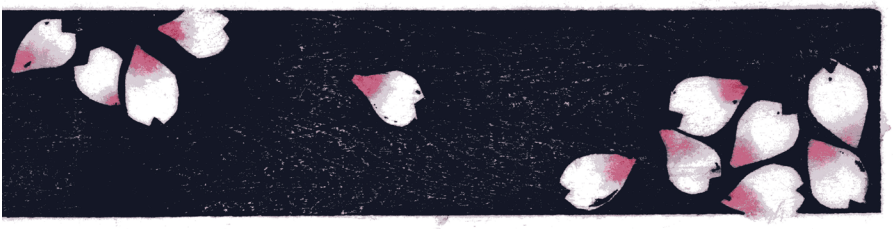
穏やかな介護の声す秋隣　斉藤裕子

こんな目に何んでと呟いてゐる暑さ　篠田純子

雲の峰崩落しさうなるがあり　定梶じょう

初なりのゴーヤ月ほど曲がりけり　須賀敏子

わが優柔汁の茄子の浮きやすし　竹内弘子



そば処青藻に金魚泳がせて　田中藤穂

車椅子腕右左夏木立　長崎桂子

立葵天に昇るがごときかな　早崎泰江

老鶯やコの字に廊下案内され　森　理和

秋の昼ふはりと眠くなりにけり　吉成美代子

欄のひまより梅雨のあけゆくも　吉弘恭子

憶ふこと偲ぶことあり走馬灯　赤座典子

根上がりの大木夏雲を捉ふ　吉弘恭子

喜孝抄

九・十月作品より

佐藤喜孝

虚子庵に句会あるらし半夏生　　赤座典子

虚子庵は小諸と鎌倉にあるといふ。虚子庵を訪ねる人は大方俳句を嗜む人であらう。訪れた時にそこで句会がなされてゐるとなれば興味が湧くのは尤もである。「あるらし」とすげない素振りであるが、だうしてだうして。それにしても季語が今ひとつそぐはないとおもふ。

足裏に活断層や田水沸く　　大日向幸江

いまもラジオから〝活断層〟の言葉が何回も聞える。原発の下を活断層が走ってゐるか？といふ話だ。「足裏に活断層」とは立つ人の足裏は勿論、日本の何処に立っても活断層だといふ意でもある。はっきりしない不安感を「田水沸く」で象徴してゐる。

手ごたえのありて怖ろし蝿叩　　木村茂登子

蝿叩を打下ろす。打損じるだろうと思って力いっぱいしたのだが、案に相違して手ごたへがあった。手応へのあればあったでその惨状をおもふと……。意識の変換が面白い。

薬液の膨らみて落つ半夏生　　斉藤裕子

身辺の大変化でしばらく出句をお休みされてゐた。点滴のやうすであらう。点滴の薬液の落下するやうすをじっと見詰める。看病で付添ってゐる人の心持が点滴のやうすを詳しく述べる。多弁を要しない表現で作者の思ひが読者にひしひしと伝はってくる。半夏生は「この日は

さまざまな禁忌があり、物忌みをする風習があった。」と歳時記で説明されてゐた。

蟭螟やヒックス粒子が見つかった　篠田純子

蟭螟は焦螟とも書く。「蚊のまつげに巣くうという想像上の小虫。微小なもののたとえ。」とありなぜか夏の季語になってゐる。以前この季語を知ったときは驚いた。興味が湧き早速作ってみたが失敗作ばかりであった。この句も成功してゐるとは云へないが難題に挑戦する姿勢を好もしく思った。

一畝に茄子と蕃茄と母長生き　定梶じょう

一畝に違ふ作物を育ててゐる。専業農家ではなささうだ。自家用として母が育ててゐるのだらう。この句の面白いところは「母長生き」である。一畝の茄子とトマトと母が並んでゐる。茄子などに母が同化してゐるやうだ。「母長生き」が何とも愛情溢れてゐて好もしいとおもった。

木賊より高くは飛ばず梅雨の蝶　竹内弘子

地を這ふやうに飛んでゐる梅雨の頃の蝶の飛びざまである。「梅雨の蝶雨より低くとびつづけ　喜孝」は〝低く〟といふが掲句は〝高くは飛ばず〟と高みへと読者の意識を誘ふ。高さの物差に〝木賊〟とは趣がある。この句の眼目にもおもへる。

光りつつ樹液は流れ梅雨の雲　田中藤穂

鬱々たる梅雨雲。梅雨どきの微光を集めて樹液が光ってゐる。明暗が際だつ。「樹液は流れ」の表現に感心した。「樹液の流れ」では勢ひが失せ、「樹液流るる」では緊迫感に欠ける。「樹液流れて」でもいけない。梅雨時の生物の躍動感に溢れた句である。

紫陽花に路上駐車の触れゐたる　吉成美代子

人はそれぞれ気になるところが違ふものだ。作者は紫陽花に駐車した車が触れてゐることが気に掛った。車が紫陽花の露か何かで汚れると気遣ったのではない。紫陽花が車に触れられてゐることが気に障ったやうだ。気に障ったといってもほんの僅かの心の動きである。

雲の峰崩落しさうなるがあり　定梶じょう

雲の峰そのものを読んだ俳句は珍しいのではないか。これ以上はと思はせる勢ひのある雲の峰。雲の峰の成長の極みを〝崩落しさう〟と読んだ。雲の峰がまざまざと浮んできた。

初なりのゴーヤ月ほど曲がりけり　須賀敏子

育ててきたゴーヤに実が生った。うれしいものだ。小さくと曲ってゐても。そのいとしさを三日月ほどに曲ってゐると捉へたのは俳句を続けてこられた恩寵である。

車椅子腕右左夏木立　長崎桂子

人は歩いたり走ったりするとひとりでに腕も前後に動く。掲句の車椅子の人は車輪を同時にではなく右左と歩く人のやうに動かしてゐるのだろう。その様子をあたたかくみつめてゐる作者である。

老鶯やコの字に廊下案内され　森理和

大きなお寺か旅館のやうである。迷子にならぬやう案内の人について行く。右に曲り又右に同じ方向に二度曲ることを〝コの字に〟といった。老鶯がこの建物の広さと環境を想像させてくれる。〝コの字〟に作者の稚気がうかがへる

秋の昼ふはりと眠くなりにけり　＋

真夏の昼寝とはちがひ秋の昼寝は一段と寝心地がよい。〝ふはりと〟が正に秋の昼寝の感がある。

竹生島へ妻子を送り秋昼寝　田中裕明
目覚めぬて光が匂ふ秋昼寝　川島真砂夫
鳩尾に手を置き秋の昼寝かな　久染康子

憶ふこと偲ぶことあり走馬灯　赤座典子

憶ふと偲ぶは確かにニュアンスが違ふ。思ひ出し方も対象によりさまざまである。この違ひを読者それぞれ噛みしめる俳句である。

根上がりの大木夏雲を捉ふ　吉弘恭子

樹と雲との俳句。根上がりといひ大木がさらに大きく見える。雲をも捉へんばかりの勢ひである。瑣末なことを述べず夏らしい雄々しい句にまとめた。

＊七曜＊より

阿部寒林

〈五月号〉

多佳子忌

母の日に看経「父母恩重経」
白桃の句入り「紅絲」や多佳子の忌
文通の葉書は二円多佳子の忌
蟻地獄冤罪の蟻責めをうく
旧木場に偲ぶ青春鰻喰ふ
夕立来て洗ふ風化の石佛

〈六月号〉

木枯逝く

夕陽中散りて耀く濃山吹
夢の世に木枯偲ぶ花筵
木枯逝く茫茫六十年目のさくら
木枯逝く雲と交はる紫木蓮
逝く人に刻経て小さき春の雷
誰の老後も淋しさ募る蝶の昼

〈平成24年〉

八田木枯回想

その四

—夕焼けて西の十万億土透く　誓子

阿部寒林

（承前）

火を焚けば星に火の粉のまじりたる　木枯

雪降れり童貞といふ證もなく

「火を焚けばー」の句は木枯がぼくに誓子から戻った添削句稿を見せて○印の上に赤字で出来ましたと特別に記してあった。しかし六林男の巻頭句には太刀打ちが出来なかった。

木犀匂ふ月経にして熟睡（うまい）なす　鷹見

脚冷えて立ちて見てゐし孤児の野球

表鷹見は八月号までの投句で欠詠している。彼もこの年は木枯同様遂に巻頭を奪取することが出来なかった。

八田木材の紀州杉丸太（中小丸太）は製材をしてみて初めて評価されたが、前述の通り造材が専門的で見た目は無節に近く直材なのでみな良材に見える。然しやはり挽けば枝打ちの欠点が節（ふし）となって目立つ。このことを木枯に注意しておいたが、値段よりも良材を希望している業者ばかりなので一通り行き渡った紀州材の評価は決して良くはなかった。

こういう苦戦の時に前記の高野山の杉丸太が見本のように入荷したのである。これは何の問題もなく高値で取引を終えた。木場で特に木を挽く場合、歩留（ぶどま）りという言葉を重視する。一本の丸太を板にした場合その容積が何パーセント減で留まったかを見るのである。

木枯の店が初めて木場の高野杉を少しではあったが売り捌いたことによりこの歩留まりが一般の紀州材などより遥かに歩留まりがよいことが各製材所で立証されたのである。こういう原木を懐（ふところ）が利く丸太と云って値段もよい。紀州材には後がつづかない位になって了ったが、高野山の杉丸太は木場でも最良の杉丸太として売買されたのである。

滞京の木枯の朗報により片山林業は高野山の山林部と交渉してこの冬伐採し集材を

終え何時でも出荷出来る杉中小丸太数百石の全量を契約して呉れたのである。八田、片山両者から今度は数量的にもぜひ現地を見て判断して貰いたいとの依頼があった。

木場で評価が高かった材だけにこの話に乗ることに決め社長（長谷川万治）からの要請で剛（たけし）（専務―入り婿）を一緒に連れて行って少し覚えさせてくれ――というわけで専務同行となった。この年の春先でまだ寒い頃だった。高野の町へ登っても九百米位の標高であるからまだ真冬並ということになる。

翌日八田、片山の両店主と木枯が紹介し、集材地へ行く前に高野山の山林部へ立ち寄った。前述した通り数十人の係員が居り田舎の営林署など顔負けという位に手広く山林事業をしていた。現在ではどうか想像がつかない位に縮小しているに違いないと思う。

現場は奥の院を横に見て広大な植林地の大斜面を登ったところであった。寒中伐採は出材の最良の条件であるからこれは満点。然し大量の為に集材に夏頃までかかるとの話、予定では八月の盆過ぎには一斉に出荷予定とのこと。木枯と二人で密かに木場の堀割が高野杉で埋まる景を話し合って居た。

然し時季的にも出材は急いだ方がよいと進言して帰京したのであるが、遙か南方の沖で台風の何号、何号が発生し、近づきつつあることに無関心であった。同年の九月、まだ一本の丸太も出荷せず紀伊半島に近づきつつある台風十三号（アイオン台風）の

前触れの雨と濡れ戯っていたのである。
結果的にはこの台風が木枯の人生の舵を狂わせ、師の誓子は伊勢から移住することになるのであった。

台風十三号と東京移住

八田、片山材木店との合同事業である高野山の杉中小丸太は今日でも積み出せる状態にあった矢先に台風十三号が紀伊半島を襲った。
昭和二十五年九月のことである。一夜にして数百石の良質的な杉丸太を流失させてしまいこの損害は想像以上であった。後の昭和三十四年の伊勢湾台風にも云えることであるが、当時、東京方面は無害であったので深川木場は台風被害復興景気に湧いたものである。最近の例では新潟方面の大地震などで同地方の建設関係の株が暴騰したり、人の災難を益する業界も存在するということは資本主義社会の例である。
しかし十三号台風は紀州材には関係の薄い深川木場の業者には殆ど影響がなかった。後の伊勢湾台風では名古屋という大都市の被害が甚大であったので木場では好景気に湧いたものである。十三号に関しては木枯の盟友うさみとしをは次のように述べている。

「十三号台風が関西地方を襲ったのは何年のことであったか。津の八田ファミリー材木店は買付けた（当時で一億という）紀州の山林材木を一夜にして熊野灘へ流失してしまう。木枯の名前が天狼から完全に姿を消すのはこれからのことであった。一族は東京へ移転。――略」

移住後の天狼へは昭和二十五年の十二月号までの入選実蹟は一月より五・七・十・十二月号と、入選句が上席に見えるが他の号での落選は考えられず仕事上の事情で休詠したのかも知れない。昭和二十六年の天狼への出句はこれも六ヶ月くらいで頓挫している。

この十三号台風で木枯の師誓子の住居も甚大な被害をうけ蔵書の多くは流失し家屋は半壊し、一ヶ月は畳なき起居となった。実直に日記を綴っていた波津女もこの日をただ「おそろしき日」と記すのみで三十日迄の五日間は空白であった。伊勢から元の大阪移住に関しては誓子の句文集「伊勢」（非売品、還暦記念会発行）の中の「移居」に述べられている。

木枯は師誓子と東西に別れること実に二十余年で後年（昭和四十年代）伊勢上野まつりに木枯、鷹見、晩蝉等が誓子を招き一夜の歓談の席となったが、いま思うとこの日が師誓子との今生の別れとなった夜でもあった。以上は後日のことであるが、上京

後の様子に就いては数ケ月は木場に見えなかった。

ぼくが少々厚かましいと思いつつ砂町の石田波郷宅を訪れたのは初夏の頃であったか、記憶は定かではない。その頃、新聞の江東版に波郷連載の「江東歳時記」を愛読していたこともあって急にお会いしたくなり木場から二十分位なのでひとり自転車で砂町へ向った。

波郷宅は北砂町の葛西橋通りと四ッ目通りの交差点、境川という地点であり、小名木川駅からの貨物船の踏切近くで一段と低い地に波郷夫人の実家があり（スレート材料他の店）そのすぐ裏に波郷親子四人暮しの平家の住居があった。初対面であったがベッドから下りて気軽に話に花を咲かせてくれた。木枯俳句に触れた時。波郷は自分が編集責任の『現代俳句』のこともあってか、非常に作品を褒めてくれたことを覚えている。次回二人での訪問を約して辞したがその時、色紙五枚を書いて頂き今日迄大切に保存している。

（つづく）

森川町「みの屋」
八田木枯氏と木村嘉男氏（萱）

向いの席
飯島晴子氏と亀田虫童子氏

市ヶ谷にて　松崎豊氏と

交番に老婆保護され十三夜

弟が世を去って三ヶ月，未だ気分は重たく暗い。細木数子の六星占術をパソコンで調べてみると私は木星人、寅年生れだからで零合星人でもある。平成十九年、運気は〈財政〉で「大胆にチャレンジ、しかし自分にとっては大切な人を失うことがある」と書いてある。

私にとって「大切な人」とは弟。「チャレンジ」とは思い切って取り替えた自動洗濯機で新規巻き直し再出発を図ったことに符合するようだ。さて、十二月で東一俳句会も解散するが、淋しいけれど不思議に、楽しかった思い出が走馬灯のように流れはじまる。

多くの思い出が私を勇気付けるように

〈二〇〇九・十一・三〉

ここまでの自分でありし温め酒

尖閣諸島、国後島は昔から因縁とされるが、この処の尖閣ビデオ映像の流出は国家代表として、管首相、仙石官房長官を悩ませている。「弱り目に祟り目」加えて、解決済みと思われていた領土問題が再燃、その隙を衝いて中国、ロシアの悍しさ、結局は「負けれず賊軍」Ｓｅｎｇｏｋｕ・38とゲーム感覚、正義感旺盛な人達。

私の良く唄う相撲甚句に「千石積んだる船でさえ港出ゃ時きゃまともでも波風荒きゃー出て戻る」とある。落着いた世になって欲しいものだ。

〈二〇一〇・十一・十六〉

近世俳諧と漢詩文　六十

王　岩

白眼看他世上人

苔咲くや自慢を聞に来る雀　　一　茶

前掲の句は『七番日記』に出典した小林一茶の作品で、句題として使われた「白眼看他世上人」は王維の七言絶句「題崔処士林亭」の結句である。

緑樹重陰蓋四鄰、　緑樹の重陰　四鄰を蓋う
青苔日厚自無塵。　青苔　日に厚うして　自ら塵無し
科頭箕踞長松下、　科頭にして　箕踞す　長松の下
白眼看他世上人。　白眼にして　看る　他の世上の人

また、『発句鈔追加』には次の句形も見られる。

白眼看他世上人
花咲や自慢をきゝにくるすゞめ

他には風和という近世俳人は王維詩の起句「緑樹重陰蓋四鄰」を句題として次の句を詠んだ。

緑樹重陰蓋四鄰
遁ては蝉にかくるゝ鼾かな　　風和

蕪村も王維詩を下敷きに次の句を詠んだ。

鰒の面世上の人を白眼ム哉　　蕪村

王維の「題崔処士林亭」は近世俳人たちが愛誦していた唐詩である。

津波後一年半の三陸

赤座典子

陸前高田三句

海望む普門寺に尚蓮二輪

地蔵堂新た秋雨明るうす

被災松親子地蔵に秋ともし

浄土ヶ浜　三句

海猫の一斉に向く秋日差

秋潮へきらり海鵜の急降下

身に入めり「見に来てくれてありがとう」

津波きて只一面の秋野原

秋霖やぼた山のやう瓦礫積む

外壁に「撤去ＯＫ」ほたる草

カーナビの銀行消えて秋の浜

元気になあれひた走る道今年藁

仮設住宅やんまの川の奥の奥

ぽつぽつとずんぐりと稲架並びをり

さんまさんま宮古のさんま流石なり

薄紅の秋明菊は物問ひたげ

つがる黄王さんさ岩手は元気です

再訪を心に決めし秋彼岸

あとがき

阿部寒林先生から慶応病院よりお葉書を戴いた。今最新鋭の治療をしてゐる、「あを」の皆様に約束を果せず残念、といふ趣旨であった。そして俳句が添へられてゐた。私は何も返事が書けず只その句に句を添へただけであった。

山眠る僕はもすこし起きてゐる　寒林
沖待ちの船もどる冬凪　喜孝

吟行案内

今月の表紙の写真は昨年行った三宝寺池です。前にも行ったことがあるところですが、前回は早春の候でしたので又違った趣があります。

十二月一日　十二時半　豊島屋〈公園内の茶店〉にお集り下さい。昼食はこの茶店で戴くか弁当持参して下さい。

交　通

西武池袋線「石神井公園」駅下車　徒歩七分
西武新宿線「上井草」下車　長久保行バス「三宝寺池」下車。

二〇一二年十一月号

発行日　十一月十一日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　6908　6038

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。